

特集

病院のセキュリティ

地域に開かれた病院には多くの患者、その家族、そして見舞い客が訪れる。不特定多数が来院すると言ってもいいかもしれない。一方、患者の医療情報はきわめてナイーブな個人情報である。病名や予後ばかりではなく、受診や入院の事実そのものが秘匿すべき情報となることもある。

病院は、地域住民から安心と同時に信頼を勝ち得なくてはならないことは言うまでもない。多くの病院管理者はセキュリティの確保を社会的責任として腐心する。そこで、総論として、情報セキュリティ大学院大学の林教授には「組織的セキュリティ」や「物理的セキュリティ」を包含した「情報処理システム」としての病院について執筆していただいた。そのうえで、設備としての患者の安全管理、あるいは保安全管理、事故を防ぐファシリティ・マネジメントの重要性について設計・建築の立場から千葉大学の中山教授、そして現場を守る施設管理の立場から暴力等への安全対策について聖路加国際病院の小室マネジャーに執筆していただいた。

また、これからの医療サービスの効率的な提供のためには、地域における医療機関間で患者情報をシームレスに繋げることが必要であろう。これによって重複検査や重複投薬の防止をはじめとして多くの無駄を省くことができ、患者の負担も医療費も低減されるはずである。これからの医療の質の標準化と検証のためには、ひとつの医療機関の中ばかりではなく、様々な病期を扱う地域の医療機関間での役割機能分担と連携クリティカルパスの普及が鍵かもしれない。そこでは、連携医療機関間での情報と価値観の共有が必要であろう。さらに、これから急速に進展する高齢化社会においては、複数の慢性疾患を持ち、複数の医療ばかりか複数の介護、福祉サービスを利用する患者の増加と向き合う必要がある。そこでは、患者の生涯にわたる医療、介護、福祉サービス提供者間での情報の共有化が必要となろう。

まさに、患者を核にしたこれらの様々な制度やサービス提供者で入力される情報が電子化され、蓄積され、共有され、“ビッグデータ(Big Data)”となっていくのである。そして、これらデータの使い方次第では、公衆衛生など国民の厚生に寄与することも、ベストプラクティスの解析に寄与することもあるかもしれないし、P4P(Pay for Performance)など支払い方式として医療経済に寄与するかもしれない。

今回、このような時代背景のもとで、特に電子化された医療情報を扱ううえで留意すべきセキュリティの観点を重視し、多くの専門家に執筆いただいた。個人情報保護法への対応やリスクマネジメント、さらにはICTによる医療情報の連携におけるセキュリティ対策などの最近の知見を整理していただいた。

加えて、RFID(Radio Frequency Identification)の利用やバイオメトリクスの応用など、最新のセキュリティ技術と病院におけるその応用について、事例と効果の最前線を探り、今後の病院のセキュリティの潮流を読者とともに感じ取ってみたい。

神野 正博

社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院 理事長